

Ritsumeikan Asia Pacific University

APU

September 1999 **Vol.6**

CONTENTS

p1 ● 船橋洋一氏よりAPUへのメッセージ

p2 ● INTERVIEW 小方昌勝氏「21世紀のアジア太平洋と観光」

p4 ● 日本語スピーチ・コンテストに参加して/留学生受入れ行動【ベトナム編】

p5 ● APU Q&A

p6 ● APUの教育システムの準備状況と特徴

p7 ● 「APUからの提案」を発表/APU建築工事前棟式を挙

p8 ● RITSUMEIKAN TOPICS

A JOURNAL REPORTING PROGRESS OF RITSUMEIKAN ASIA PACIFIC UNIVERSITY

朝日新聞編集委員 船橋洋一氏より立命館アジア太平洋大学へのメッセージ

アジア太平洋の知的フュージョンを



「立命館アジア太平洋大学」の誕生は、日本とアジア太平洋の21世紀の幕開けにふさわしい一大事業です。

この地域は経済的にますます統合しつつあります。しかし、今後は知的にも統合していかなければなりません。相互の歴史、言語、社会、習慣を学び合い、それらを尊重する中から、人々の対話も信頼関係も深まるのだと思います。大学はそのためのincubator（孵化装置）です。ここからさまざまな知的フュージョンが生まれることでしょう。

"The Intellectual Fusion of the Asia-Pacific"

The birth of Ritsumeikan Asia Pacific University is a large-scale undertaking worthy of Japan and the Asia-Pacific Region at the dawn of the 21st Century. While we are witnessing the region's gradual economic unification, we must also strive for intellectual synthesis. By learning from each other and respecting our mutual history, languages, societies, and customs, we can deepen the dialogue between people and build a trusting relationship. For this purpose, the university will be an "incubator" from which various kinds of intellectual fusion will be born.

profile FUNABASHI, Yoichi

[プロフィール]

朝日新聞社編集委員、前アメリカ総局長。北京特派員、ワシントン特派員などを歴任。現在、朝日新聞に「日本@世界」（毎週木曜日）、週間朝日に「船橋洋一の世界ブリーフィング」を連載している。主な著作に『内部—ある中国報告』（サントリー学芸賞）『通貨烈々』（吉野作造賞）『アジア太平洋フュージョン—日本とAPEC』（アジア太平洋大賞）『同盟漂流』（新潮学芸賞）など。1992年、慶応大学法学博士号取得。小淵首相の私的諮問機関である「21世紀日本の構想」懇談会委員。

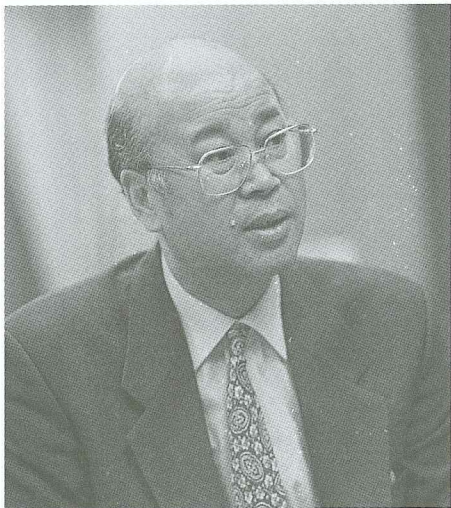
船橋洋一
Yoichi Funabashi

小方 昌勝

OGATA Masakatsu

立命館大学 経営学部教授

小方氏は、前特殊法人 国際観光振興会 フランクフルト観光宣伝事務所長・パリ観光宣伝事務所長・理事。また、通訳ガイド国家試験第二次試験試験官(英語・ドイツ語)、東アジア観光協会副会長、太平洋アジア観光協会理事などを歴任。



—— 本日は、立命館大学経営学部の小方昌勝教授にお越しいただきました。アジア太平洋地域における観光の発展についてお話を伺いたいと思います。まず、先生はアジア太平洋地域についてどのようにお考えですか。

小方 数百年以前、世界の経済活動の中心は「地中海」から「大西洋」に移行していきましたが、今やその中心は大西洋から「太平洋」へと大きく転換しつつあります。1997年にアジア経済危機が発生するまでは、多くの機関や未来学者たちが口を揃えて「21世紀はアジア太平洋の世紀」だと褒めそやしていましたが、中核となるアジアの経済情勢が悪化すると、掌を返すようにアジア太平洋、特にアジアの将来に対する悲観論が続出しました。しかし、現在のアジアは西欧列国の植民地下にあった時とは違って、他地域を圧する力を有するばかりでなく、世界の期待を担うダイナミックでパワフルな地域に大きく変身をとげており、その潜在力は21世紀の世界にとって不可欠な存在となるに違いありません。

私は、「アジア太平洋」の潜在力を7つほどの視点から理解しています。第一に、アジア太平洋は世界全体のほぼ半分を占める広大な地域を有します。第二に、アジア太平洋地域の人口は世界の約3分の2を占めます。第

三に、アジア太平洋地域の財・サービス貿易の額は、輸出入とも世界全体の40%強を占め、新世紀に入っても順調な成長が予想されます。第四に、アジア太平洋の域内貿易のシェアは約70%と高く、相互依存関係の一層の緊密化により、特にアジア地域における経済力向上への寄与が期待できます。第五に、21世紀の社会において中心的存在となる情報・サービス・エレクトロニクス及び各種先端科学技術がアジア太平洋地域の多くの国にしっかりと定着し始めています。第六に、後発の状態にあったアジア諸国が平均して経済発展を果たし、生活水準・教育水準が他地域のレベルに近づき、有力な中産層を中心とする膨大な消費人口が生まれています。そして、第七に、国際航空運送協会の予測では、アジアの航空路線の利用量は年率7%の伸びを示し、2010年には世界に占めるアジアの比率が50%を超えます。

このように、地理、人口、経済等の点からみても、この地域は極めて大きな潜在力を有しています。アジアの主要国のいくつかは、すでにアジア経済危機からの回復への歩みを進めており、「一時的な頓挫」を経て新世紀の初期には世界に最も影響を与える地域としての地位を確立することは間違いないでしょう。

—— アジア太平洋地域において観光事業はどれほど台頭してきているのでしょうか。

小方 世界観光機関(WTO)が発表した「観光2020ビジョン」によりますと、アジア太平洋地域における観光客到着数は2010年は米州を抜き、2020年には欧州(7億1700万人)に次ぐ4億1600万人(世界全

21世紀のアジア

体の約27%)に達すると予測されています。21世紀には、「観光」がこの地域にとって社会的経済的に重要な産業として位置づけられることが確実視されているのです。

アジア太平洋地域における経済活動の拡大、所得と生活の向上、産業機構の進歩等が労働時間の短縮と余暇を生み、自由時間を楽しもうとする価値観の変化は余暇活動としての「旅行」を増大させました。また、モータリゼーションの広がり、地上輸送ネットワークの整備及び航空部門の発達(ジェット機、大型航空機等)が短時間での遠距離旅行を可能にさせる一方、技術の発展に伴うコミュニケーション手段の進歩が旅行情報の伝達、観光宣伝、予約・手配等を迅速かつ確実、低廉なものとししました。

以前は経費や自由時間の関係から限られた層だけに許されていた観光旅行が、社会環境の改善とともに大衆化され、アジア太平洋地域の多くの人々が外国旅行に出かけるようになりました。特に、日本(1964年)、台湾(1979年)、韓国(1989年)における外国旅行の自由化以後は、アジア諸国が有望な送り出し市場ともなり、世界の観光市場に強いインパクトと期待を与えるようになっていきます。

—— 21世紀におけるアジア太平洋観光をどのように見たらよいのでしょうか。

小方 21世紀にむけたアジア太平洋観光の潮流は、大別して以下の3つの流れで特徴づけることができます。一つ目は、マス・ツーリズムからオルタナティブ・ツーリズムへとという流れです。戦後、植民地の暗い歴史から解放され独立を果たしたアジア太平洋地域の

太平洋と観光



国々は、多額の投資が不要で経済効果が高い「観光事業」に着目し、マス・ツーリズムを積極的に促進してきました。その結果、やがて自然や文化財の損失に直面することになり、1990年代に入ると、世界的な環境問題への取組みに呼応して「オルタナティブ・ツーリズム（もう一つの観光）」に目が転じられるようになりました。この中には、アジア太平洋地域の豊かな観光資源が最大限に生かせる「エコツーリズム」「アドベンチャー・ツーリズム」「エスニック・ツーリズム」等が含まれており、今後の観光振興の新しい形態として大きな期待が寄せられています。

二つ目は域外交流から域内交流へという流れです。従来、アジア太平洋地域への観光交流の中心は、欧米先進国等の域外からが主流でしたが、この地域の経済活動の活発化、生活水準・教育水準の向上、価値観の変化、域内の相互依存度の高まりなどを受けて、業務や観光を目的とする旅行が急速に増加し、1997年には域内交流が、全体の70%に達する程になっています。この傾向は、今後のアジア太平洋地域の発展と成熟性を考えますと、一層高率化するものと思われます。

三つ目は電子技術の利用の流れです。拡大成長から改革に向かっているアジア地域では、電子技術の進歩を受けて、米州やオセアニアにも負けない速さで情報通信分野の整備が進んでいます。また、今後急速に展開が予想される情報ハイウェー、高速通信網等の観光事業への活用が必要となるでしょう。

—— 最後に、アジア太平洋の観光について、注目していけば良い点をもう少し教えてください。

小方 一つ目は環境です。1992年の地球環境会議以降、地球温暖化、森林減少、海洋汚染等が地球規模の環境問題として取り上げられるようになり、「持続可能な成長」の概念が導入されました。観光界でも「持続可能な観光」を実現するための「エコツーリズム」等の研究が進み、定義、倫理コード、対処方法などが多数発表されました。自然資源や文化遺産に富むアジア太平洋地域では、今後とも環境保全への関心を活かす分野における旅行需要の拡大が期待されています。

二つ目は情報テクノロジーの活用です。インターネットなどのマルチメディアを中心とする情報システムが、観光界にも大きな影響を及ぼしつつあり、情報提供や予約に加え、精算等の多様な活用が急がれています。

三つ目は華人圏です。今後のアジア太平洋地域の発展に不可欠なセグメントとなるのが「華人」の勢力です。華人の数は世界で5700万人（アジアだけでも5300万人）に達し、総資産は2000億ドルから3000億ドルと言われています。アジア主要国の経済活動にも深く関与し、華人ネットワーク自体がすでに一つの巨大な市場を形成していると言えます。

四つ目は宗教です。アジア太平洋地域には、原始・祖先信仰、世界の3大宗教（仏教、イスラム教、キリスト教）、さらには儒教や道教などの数多くの宗教が存在します。宗教の影響は社会生活や思想にまで及んで独特の魅力ある世界の形成を促しますので、広義に考えれば「旅」のエキゾチズムにも通じます。

巡礼や宗教文化財・遺産を訪ねる「宗教観光」は、その多様性の故に世界に強い訴求力を発揮することになります。

五つ目は高齢化社会です。国連の長期予測によりますと、2025年の世界総人口80億人のうち65歳以上の高齢者は8億人（総人口の10%）で、2050年には14億人（同15%）に拡大するとのこと。比較的に自由時間と経済的な余裕を有する高齢者層は、新世紀における有望な旅行マーケット（シニア・ツーリズム）として注目されています。

—— 21世紀のアジア太平洋における主要産業の一つである観光の動向について、貴重なお話を伺うことができました。本日は、どうもありがとうございました。

日本語スピーチ・コンテストに参加して

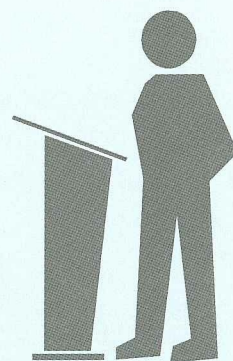
Sixth Annual Japanese Speech Contest for Secondary School Students

サンフランシスコの空港から車で10分ぐらいの所にあるMills High Schoolで5月1日(土)加州日本語教師会(California Association of Japanese Language Teachers)主催の「中高生のための日本語弁論大会(Sixth Annual Japanese Speech Contest for Secondary School Students)」が開催されました。APUとしては、始めて参加しました。

参加者はカリフォルニアの中学・高校で日本語を学ぶ学生約135名で、日系人の子弟のみならず、中国系・ヨーロッパ系等幅広い人種の学生が参加し、父兄・付き添いの日本語教師等を合わせると160~170名の出席者があり、なかなかの盛況でした。

レベルはI~IVの4段階に分かれ、最も高いレベルIVでは、高校生が三年間日本語を勉強してきた成果を、「My Dream」とか「My Hero」といったテーマで10分ぐらいのスピーチを行い、その後審査員から内容に関する質問を受けるというものでした。日本に留学したいという学生もいて、アメリカ、特にシリコン・バレー等ハイテク企業が集まるカリフォルニア住民の日本への関心の高さ、言語・文化教育の質の高さを感じました。

APUとしては、全員に参加賞としてAPUグッズのペンと紹介パンフレットを贈呈しました。現地で、または帰国後に資料請求や葉書による問い合わせが約20名の教師・学生からあり、広報の効果を確認すると同時に、今後もこのような活動を通じてAPUの認識を広める必要を痛切に感じました。



in San Francisco

留学生受入れ行動

[ベトナム編]

ベトナムグループでは、2000年4月のAPU開学へ向け、いよいよ具体的な説明に入りました。

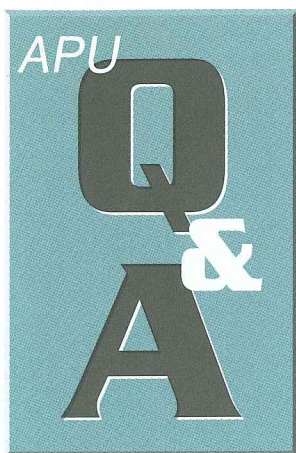
ベトナム全土から意識の高い学生を集めるべく、4月には新聞各紙に一齐にAPUの大学案内及び当地における留学説明会の案内を掲載しました。5月にはハノイ、ホーチミン、フエの3都市において立命館大学教職員による説明会を参加者400名強を得て、開催しました。何れも、日本への関心が非常に高く、確かな手応えを感じる説明会となりました。彼らが日本へ抱くイメージは、多岐に渡っていますが、共通して言えることは、「欧米諸国と対等に渡り合う経済大国」、「国際化を成し遂げ、これからの地球規模での交流、流通時代を迎えるに相応しい先進国」と言った大変な憧憬に値するものでした。現実に日々日本で暮らしている私たちからして見れば、問題が山積している国ではありますが、それでもなお日本への好印象を抱いてくれる仲間達が回りで見えてくれるという事実を、私たちは謙虚かつ厳粛に受け止めながら、この説明活動を推進して行きます。

留学説明会終了後、ベトナムの多くの学生からAPUへ、問合せが届いています。

学費の工面等、彼らが乗り越えなければならない問題は多々ありますが、真剣に向かって来る彼らの情熱を少しでも実りあるものに出来る様、今後共、精一杯の活動を続けて行くつもりです。



Vietnam



教学関係

Q1 APUを卒業すれば、どのような学位が授与されますか？

A1：アジア太平洋学部を卒業すれば「学士（アジア太平洋学）」（「Bachelor of Social Science」）、アジア太平洋マネジメント学部を卒業すれば「学士（アジア太平洋マネジメント学）」（「Bachelor of Business Administration」）が授与されます。

Q2 海外からの留学生が、APU在学中に1年間日本国外へ留学することは可能でしょうか？

A2：可能です。APUでは日本国内からの学生、留学生の区別なく海外留学プログラムへ参加できます。現在検討されている海外留学プログラムの対象国・地域は、中国、台湾、韓国、インドネシア、マレーシア、タイ、ベトナム、フィリピン、シンガポール、インド、スリランカ、オーストラリア、ニュージーランド、アメリカ、カナダ、イギリスなどです。

Q3 APUでアジア地域の観光学等の「修士学位(Master)」を取得することは可能ですか？

A3：APUは、2000年4月の開学当初は、アジア太平洋学部およびアジア太平洋マネジメント学部の2学部を設置し、取得できる学位は上に説明したとおりです。しかし、2003年には大学院を開設する予定ですので、修士の学位を取得することは可能です。さらに立命館アジア太平洋大学の学部学生については、学部を3年間で修了し大学院へ進学できるカリキュラムを現在検討しています。

Q4 英語と日本語の両方の言語で授業が行なわれるそうですが、入学時の基準言語と違う言語で行なわれる授業にもついていけるのでしょうか？

A4：1・2年生時に受講する基礎教育科目は、ひとつの科目について英語で行なうクラスと日本語で行なうクラスの両方を開くことを原則としています。1・2年生時には入学時の基準言語となった言語で行なわれる講義を受けながら、並行して言語教育を通じてもう一方の言語（英語基準で入学した学生は日本語、日本語基準で入学した学生は英語）の力を養います。したがって、2年生後半または3年生以上の学生は英・日両言語で講義の受講や討論が可能となります。

Q5 学生が在学中にインターンシップを経験することは可能ですか？

A5：可能です。APUでは、企業や自治体、NGO（非政府組織）、NPO（非営利団体）などで学生が実際の仕事に触れながら学んでいく機会を積極的に設けていきます。

Q6 学生は大学卒業後の進路を今から気にしているようです。APUではどのような進路・就職の支援を行なうのでしょうか？

A6：APUでは、学生ひとりひとりの学習目標や志望する進路の実現に向け、適切な科目選択のアドバイス、学習指導などを行ないます。学生の学習や様々な活動の状況、スタッフによるアドバイスの内容などを各々の「キャリア・チャート」に書きこんでいき、ひとりひとりの実態・希望に即した系統的な援助を行ないます。また、正課の学習に加え、資格取得や将来の進路を視野に入れた各種講座を設置し、学生をサポートしていきます。

Q7 APUではインターネットをはじめ、パソコンを活用した学習がおこなわれるそうですが、今まで一度もパソコンに触れたことのない学生が授業についていけるのでしょうか？

A7：21世紀においてはパソコンやインターネット通信を道具として使いこなすことが求められるようになるでしょう。APUでは、パソコンに触れたことのない学生でもパソコンを使用したレポート提出やプレゼンテーション、Eメールやインターネットの活用、簡単なプログラミングなどが行なえるようになることを目指しています。そのために、入学直後のオリエンテーション期間中に、パソコン講習と個別相談会を行なうとともに、「情報科学入門」「情報処理論Ⅰ」を全員が履修するよう指導します。

Q8 APUの学生も立命館大学で学ぶことはできますか？

A8：APUでは、同じ学校法人のもとに運営されている立命館大学で学ぶ制度をつくる予定です。また、情報ネットワークを用いて、APUで立命館大学の講義を受講できる遠隔地講義制度も導入していきます。

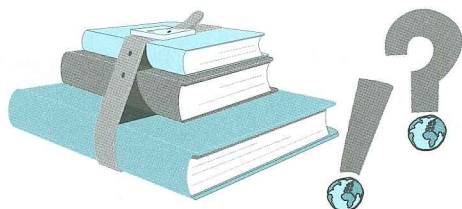
学生生活関係

Q1 留学生が在学中にホームステイを体験することはできますか？

A1：現在、大分県および民間の国際交流団体が、ホストファミリーの確保やホームビジット・里親制度の受入れ体制の整備について準備をすすめています。

Q2 私の国と日本とは大きな経済格差があり、学費や生活費の支弁に不安を持っています。入学してからアルバイトを行うことは可能ですか？

A2：日本への留学生は、法律で1週間に28時間以内のアルバイトができることになっています。APUでは大学内でのアルバイト斡旋も含めて、現在関係機関と調整を行っています。



APUの教育システムの準備状況と特徴

APUは2000年4月の開学に向けてカリキュラムおよび教育システム整備の最終段階の準備に入っています。以下に、その特徴をご紹介します。

1. 各学部のカリキュラム

アジア太平洋学部

社会学、国際社会学をベースにアジア太平洋地域の発展のダイナミズムと多様性の特徴を交流とネットワークの視点から捉えています。その上で、この地域の発展にとって重要な分野である「都市と環境」、「観光」、「情報メディア」に関する学習を深めていきます。

「都市と環境」の分野では、アジア太平洋の都市と農村、アジア太平洋地域の環境問題、環境政策、エコ・ビジネスなどのテーマを、「観光」の分野では、ホスピタリティ・マネジメント、観光事業、エコ・ツーリズムなどのテーマを、「情報メディア」の分野では、現代の映像、情報メディア、情報ネットワークなどのテーマを学びます。

アジア太平洋マネジメント学部

マネジメント学、国際マネジメント学をベースにアジア太平洋地域の企業マネジメントの特徴を理解していきます。経営学、会計学の基本概念を確実に修得した上で、ファイナンスとアカウントティング、プロダクション、マーケティング、人材マネジメントといった専門分野を学んでいきます。

アジア太平洋地域のマネジメントの学習では東南アジア、西アジアなどアジア太平洋の各地域で活動する企業の特徴や、アジアの金融市場や投資戦略、人材開発など地域全体の企業経営などアジア太平洋地域における企業経営の特徴や課題などを理解し、その全貌を多角的に考察していきます。

2. 教育システムの特徴

■ 日本語および英語による2言語教育

1・2年生で学ぶ基礎教育科目は、日本語で行うクラスと英語で行うクラスの両方を開きます。

2年生以上で学ぶ専門教育科目でも多くの科目で両方のクラスを開きます。例えば国内学生の場合、1・2年生時には日本語による講義を受けながら、並行して言語教育を通じて英語の力を養います。3・4年生時からは英語で開講されている専門科目を履修することで、国際ビジネスや学術の世界で通用する高度な英語能力を身につけることを目指します。

■ 演習科目を柱にした実践的な学習

各学部に、各回生毎に小人数の演習科目を設置します。演習科目では、フィールドワークやケーススタディを採り入れ、講義で得た知識を実践的な学習を通じて応用していく力や問題解決能力をつけ

ていきます。また、調査、発表、討論を通じて調査能力、プレゼンテーション能力などを身につけていきます。さらに、学習の成果をインターネット等を通じて世界に発信するなど、学生が情報発信を意識した学習を行っていくよう工夫しています。

■ APUのネットワークを利用した学習

APUの母体である立命館学園は世界23か国・地域、80以上の大学・機関と協定を結んでいます（1999年8月1日現在）。APUはこれらの大学・機関への留学や立命館大学との交流を積極的に進めます。さらに、APUを支援する組織であるアドバイザー・コミッティやアカデミック・アドバイザーをはじめとする各界の第一線で活躍されている方々による講演、インターンシップなどを通じた企業、自治体、国際機関等との連携など、広範なネットワークをいかして多彩な教育を展開していきます。

3. 教科書などの準備

APUでは、国外からの留学生を対象にした事前学習教材「サバイバル日本語」と、すべての1年生が受講する演習科目「アジア太平洋地域理解」のテキスト、APUでの学習の仕方をわかりやすく書いた「学習ガイド」の作成を進めています。

「サバイバル日本語」は、入国審査、両替、空港からAPUまでの移動、日本での生活などに必要な最低限の日本語を厳選し、それぞれのケースごとに想定される会話を中心に構成されています。これは、日本語の学習を行うための教科書としての側面と、日本上陸後、すぐに役立つ会話集としての側面を併せ持っています。また、モデル会話はテープで聞いて練習することができるようになっています。この教材は、入学許可書を送る際にあわせて送付します。

「アジア太平洋地域理解」テキストは、アジア太平洋地域の重要なテーマを取り上げ、解説（本文）とともに、学習のポイント、学習上の質問、学習上の論点、キーワード、参考文献を付け、学習しやすいよう便宜を図っています。テキストは、APUの教員が日本語と英語で執筆しています。アジア太平洋学部に関わるテーマとして、アジア太平洋の言語と文化、アジア太平洋と日本社会、生態、

エスニシティ、人権、都市と環境、情報メディア、観光を取り上げています。アジア太平洋マネジメント学部に関わるテーマとして、アジア太平洋の経済、アジア太平洋の産業、アジアの繊維産業、イスラムの市場、日本企業の発展、アジアの金融市場、ASEANの精算ネットワーク、アジア太平洋のマーケティング、日本型経営の未来を取り上げています。

「学習ガイド」では、キャリア形成を視野に入れた学習プランを立てるために、学習の始め方と目標設定の方法、学年ごとの学習目標と内容、キャリア形成と進路選択について、APUのカリキュラム、教育システムに即して説明しています。また、言語や専門などのカリキュラムのねらいと学習の進め方についても説明しています。さらに、ブレインストーミング、文献の読み方、情報収集の仕方、レジュメの書き方、ディスカッションの方法などの学習手法について説明しています。授業では、これらを駆使した学習が展開され、学生はこうした手法をきちんと身につけていくことになります。「学習ガイド」はそのガイドとしての役割を果たすために作成しています。

APU開学で、おおいた、ベっぷに新しい風を！ 「APUからの提案」を発表

立命館アジア太平洋大学（以下APU）設置期成同盟会（会長・津末武久別府商工会議所会頭）の平成11年度総会が6月6日（日）に開催されました。APU設置期成同盟会とは、APUの開設を促進し、それにより教育文化水準の向上並びに産業経済の発展に寄与することを目的とし、1996年2月に結成されました。同盟会は、この目的に賛同する別府市内の経済団体、企業など48団体と県レベルの14団体で構成されています。

総会に引き続き、関連行事（主催/APU設置期成同盟会・学校法人立命館）が開催され、教育関係者や市民ら約350人が参加しました。まず、津末武久同盟会会長、平松守彦大分県知事、井上信幸別府市長が挨拶を行い、APUによせる期待が述べられました。続いて、坂本和一APU学長予定者が、APUの概要と開学の歴史的・社会的意義を語るとともに21世紀の大分、別府にむけて、「APUからの提案」を発表し、APUがめざす大分県・別府市への地元貢献策についての考え方を説明しました。



「APUからの提案」とは

- I) アジア太平洋時代の人材養成拠点として国際社会を担う「ひとづくり」
 - II) 学術・文化・観光・産業が世界に輝く「まちづくり」
 - III) 大学と学生が、大分、別府と世界をつなぐ「えんづくり（＝ネットワーク）」
- の三本柱で構成されています。

◆「ひとづくり」では

- ①大分県下の高校から多数の生徒を受け入れ、地元の教育振興に寄与します。
 - ②21世紀の国際人を養成します。
 - ③子供たち・青少年の成長をお手伝いします。
 - ④生涯学習・文化・スポーツ活動の場として、APUの活用機会を広げます。
- を、提案しています。

◆「まちづくり」では

- ①若いエネルギーで、県民・市民のくらしが輝く「国際学生都市」づくりに協力します。
- ②APUの教育研究資源を活かした国際学術観光都市づくりを推進します。

- ③ まちと一体となって、インキュベーター（孵卵）空間を創造し、地域産業の担い手を育て、若者が定住するまちづくりへのお手伝いをします。
- を、提案しています。

◆「えんづくり」では

- ①アジア太平洋地域に向けた情報発信の拠点として、大分、別府が多様なネットワークを広げることに寄与します。
 - ②県民・市民が気軽に訪れ、豊かな時間を過ごせる国際交流キャンパスを創造します。
 - ③県民・市民との温かい交流を通して、大分、別府を留学生の「第二のふるさと」にします。
 - ④国内外の大学とのネットワークを大分、別府の活性化に活かします。
- を、提案しています。

提案発表後、「大学のまちは面白い～大学と地域のイイ関係～」のテーマで、草津商工会議所事務局長の石田隆司さんと元草津市社会教育委員長の黒川善民さんの講演が行われました。市民と大学との交流、地域活性化への影響などについてAPUでも活かせるような貴重な経験談

を織り交ぜながら、1994年に開設された立命館大学びわこ・くさつキャンパスの紹介をしていただきました。

行事の最後に、川本八郎理事長が謝辞を述べ、2000年5月21・22日に「立命館創始130周年・学園創立100周年記念式典」「APU開学式典」「立命館大学校友会全国大会」を大分県・別府市で開催することを明らかにしました。また、大分県民・別府市民・立命館学園の情熱で、ロマンあふれるAPUの創設事業にまい進していくことを参加者の方々に呼びかけると同時に、今回の『APUからの提案』をもとに県民・市民と双方のやりとりを進め、より内容を具体的に実りあるものにしていきたいと述べ、会を締めくくりました。

当日は、司会進行役として俳優の小林綾子さんとラジオパーソナリティの内田瑞紀さん（いずれも本学校友）を迎え、息の合った司会で会場に花を添えていただきました。

関連行事終了後には、高校生や父母の方々を対象にしたAPUの魅力を語る説明会も開かれ、約50人の参加者が熱心に耳を傾けていました。

APU建築工事上棟式を挙行

立命館アジア太平洋大学（APU）の建築工事上棟式が7月10日（土）、好天に恵まれた別府市十文字原のキャンパス建設地内で、学校法人立命館、大分県、別府市、設計・工事業者、地元の関係者ら約130名が参加して、執り行われました。

上棟式とは、工事の安全を祈願し、建物の最後の梁となる鉄骨を取り付ける式であり、この式をもってAPUのすべての建物の骨格が完成しました。地下1階・地上5階建ての管理棟で最後の梁となる鉄骨（長さ8m、重さ630kg）を、立命館の学園歌が流れる中クレーンで棟の最上部にまで持ち上げられる光景は、会場参加者にAPUのダイナミックな船出を連想させるような素晴らしいものとなりました。引き続き、施主を代表して川本八郎理事長が関係者の皆様方へのお礼の挨拶を行いました。そして、平松守彦大分県知事・井上信幸別府市長をはじめ来賓の方々よりご祝辞やご挨拶をいただきました。これを受けて坂本和一APU学長予定者が「このキャンパスで立派な教育を行い、立派な青年を育てて皆様のご期待に答えていきたい。留学生・国内学生を受け入れる取り組み、地元の皆様との交流などを着実にすすめて、来年4月の開学に向けて全力を尽くしたい」との挨拶を行い、全ての式次第を終えました。

このAPU建築工事上棟式の模様は、地元のテレビや新聞等のメディアでも取り上げられ、APUを取り巻く期待が今後ますますたかまわっていくことが予想されます。



99年7月12日 西日本新聞



'99年7月26日 今日新聞

グローバル教育に関する 国際シンポジウム

1999年7月24日(土)～26日(月)大分県別府市のB-CONプラザにおいて、「グローバル教育に関する国際シンポジウム」が開催されました。このシンポジウムは、立命館アジア太平洋大学の開学プレイベントの一つとして、海外の教育・研究機関との国際的ネットワークの構築を考えるものです。湯下前フィリピン大使をはじめ、スパチャイ・ヤバプラバスASEAN大学ネットワーク事務総長等、日米中韓フィリピンなどから15大学・機関の研究者ら29名が参加して行われました。

第1セッションでは、「大学間ネットワークの構築と地域の国際化について」のテーマで報告・討論が行われ、一般にも公開されました。第2～第4セッションでは「アジア太平洋地域のネットワークと人材養成」、「交流プログラムの具体化について」、「アジア太平洋研究のための大学コンソーシアムについて」の各テーマについての報告が行われ、国際的視点をもった教育の方法、教育・研究機関の交流等について、活発な議論が交わされました。

附属校生へのAPUツアー開催

～平松大分県知事、井上別府市長を訪問～

去る6月20、21日、APUへの進学を希望している本学の附属校、立命館高校・立命館宇治高校・立命館大学慶祥高校の3年生対象のAPU取材・見学ツアーを開催しました。

参加者は、各校の3年生・APU担当教員および大学職員の総勢20名です。この企画は、生徒自らがAPUの現地に行き、来春の進学に向けての夢をふくらませるとともに、他の3年生へAPUの魅力伝える語り部になってもらおうということで準備を進めてきました。

一行は、キャンパス見学では大学職員の案内・説明を受け、また建築中のAPハウスに実際に入るなどキャンパスを実感しました。平松守彦大分県知事・井上信幸別府市長への表敬訪問では、APUへの期待を両者より直接伺いして、キャンパス・地元の雰囲気等を他の学生より一足早く味わい、オープンキャンパスでの再会を約束して、京都・北海道への帰路につきました。参加した生徒は一律にAPUへの確信を深めた様子でした。

なお、今回の訪問は新聞各紙でも報道され、NHKの朝のローカルニュースでも放映されるなど、地元マスコミでも大きく取り上げられました。



'99年6月22日 西日本新聞

APハウスにモデルルーム完成!

APハウス(学生居住施設)の1階部分に、5月中旬、個室のモデルルームが完成しました。

モデルルーム内には机、椅子、本棚、クローゼット、ベットなどの設備が整えられており、これまでに見学に来られた県・市関係者や文部省留学生課長、本学付属校生からは、APUでのキャンパスライフやAPハウスでの生活が具体的に想像できると、大変好評をいただいています。

APハウスは、世界中から集まる学生が日常生活を通じて共に成長し、異文化間の相互理解を図ることを目的とした学生居住施設で、個室426室の他にセミナーハウスの機能も持っています。2000年3月中旬から、入居を希望する大半の新入生がAPハウスで居住を開始することになっています。

